

北斎は最晩年に至って「画狂老人」と名乗るほど「狂」にこだわりました。当時、この「狂」は、近代ヨーロッパで言われてきた「天才」に最も近い意味合いを持っていたと言ってもいいかもしれません。一方、お上の指図に従って無事無難に世を過ごす生き方を自分に許せない、くぐもった怒り、波を立てない社会とそこに居座る権威に対する静かな怒り—この場合「静か」というのは、騒ぎ立てて無駄に「御用」となるのは避けているという意味です—それに対抗して生きて行くために、北斎や多くの画家、俳人、物書きが選んだ姿が「剃髪黒衣」、つまり坊主姿になることでした。「狂」と「剃髪黒衣」は、彼らにとっては同じ生きかたを指していました。いずれも現況の「社会」の<外>に自分の位置を置くことが出来る、そういう生きかたを、保証してくれたのです。

しかし、蕪村は、俳諧師となり、絵師となるために頭を丸め、浄土宗の門をくぐりましたが、みずから、「狂」を名乗るほど、現況社会に対する怒りを表現する仕事は遺していません。どこか、時代社会を軽く冷ややかにというちょっと誤解を招きそうですが、まさに、俳諧精神を發揮して、怒りは腹の底に沈め、ちょこちょこっとくすぐって、あとは身をすくめておく、とでもいえばいいか、そんな姿勢で社会を生き抜いています。時代に決して妥協はしないが、無用に歯向かいもしない。

北斎も、その点では、「狂」は名乗ったけれど、名乗ったところで踏みとどまっています。先輩の歌麿の姿をすぐ近くで見ていたからでしょう。

俳諧師は、浮世絵師に比べて、お上の睨みは柔らかかったようだし、蕪村もお上に睨まれるような絵は作らなかった。文人画で生業する町絵師であり、俳句の仲間はお金持の商人たちが中心で、彼らは我が世を彼らなり謳歌し、過激に時代を呪うようなことはなかった。江戸と京のちがいもあるかもしれません。蕪村が選んだ環境は北斎に比べると危険度、危機意識は低い世界でした。しかし、じっくりその絵を観、句を味わっていると、底のほうにしたたかな、怒り、時代の支配思潮へ非妥協的な姿勢が、じわりと汲み取れます。これは、彼の生まれ育ちと関係が深いと思われれます。

見ない振りをして見ている。そういう見方です。それこそ「俳諧物之草画」の生きかたと見えそうです。

「岩くらの狂女恋せよほとゝぎす」の句を配した「よせ張物」一枚は、こんなことを考えさせてくれる一枚になりそうです。